

# 紀要

## ■設立50周年記念号

- 鳥浜貝塚におけるニホンジカの利用…………… 佐藤 巧庸 (1)
- 土偶の意味論に関する理論的基盤の整理と試論…………… 瀬口 眞司 (13)
- 湖北・湖東地域の前期古墳の葺石…………… 宮村 誠二 (23)
- 横穴式石室の空間設計の検討  
—志賀古墳群における平面プランと副葬土器…………… 堀 真人 (28)
- 木村石塚古墳出土埴輪について…………… 辻川 哲朗 (40)
- 近江八幡市大中の湖南遺跡の再検討  
—石敷き遺構 第1遺構の構造について— …………… 田中 咲子 (57)
- 小型海獣葡萄鏡について…………… 福井 知樹 (61)
- 墨書土器にみる古代の近江 —その2—…………… 濱 修 (64)
- 比良山系の山寺に築かれた石垣と回峰ネットワーク… 小林 裕季 (79)
- 『阿刀氏家譜系脈 御由緒二関ハル古記調査書類』  
現代語訳・解題(2)…………… 阿刀 弘史 (90)
- 将棋史研究ノート 11—改めて将棋について考える—…………… 三宅 弘 (98)
- 「清瀧寺徳源院」絵図の示すもの…………… 中川 治美 (107)
- マメ類の利用についての研究ノート(2)…………… 小竹 志織 (119)
- 木製品の保存処理について —課題と実際—…………… 中村 智孝 (122)

# 34

## 近江八幡市大中の湖南遺跡の再検討

### —石敷き遺構 第1遺構の構造について—

田 中 咲 子

#### 1. はじめに

大中の湖南遺跡は、近江八幡市安土町下豊浦に位置する。ほ場整備事業に伴い平成 12～13 年度に実施した発掘調査では、旧内湖の水際から内湖側に向かって造られた、7 世紀後半～8 世紀頃の石敷き遺構 2 基（第1遺構・第2遺構）を良好な状態で検出した。これらの石敷き遺構は、港湾施設であると考えられるが、その評価としては、棧橋や船溜まりを構成する消波堤や内湖を渡るための道路関係遺構などの諸説がある(1)。2 基の石敷き遺構は、造られた時期により、その構築方法が異なる。本稿では、最初に造られた第1遺構の構造について検討する。

#### 2. 遺跡の位置と歴史的環境(図1)

##### (1) 遺跡の位置

近江八幡市安土町の北西部には、「大中の湖」・「小中の湖」(「西の湖」・「弁天内湖」・「伊庭内湖」で構成)を合わせ、「中の湖」と呼称した内湖が存在していた。「中の湖」は、水面面積 15.4k m<sup>2</sup>を測る、長野県の諏訪湖を上回る規模をもつ内湖であった。しかし、昭和 21 年から約 20 年間にわたり行われた干拓事業により、現在のように「西の湖」を残すのみとなっている。

古代の石敷き遺構は、「旧小中の湖」の幅が狭くなった地点の南岸に近い部分で検出した。石敷き遺構が棧橋や船溜まりなどの機能をもっていたとするならば、この場所に接岸されていた舟は、北側に繋がる大中の湖を通過して、琵琶湖へと移動できたことになる。

##### (2) 歴史的環境

弥生時代中期には、旧大中の湖の干拓工事で発見された、大中の湖南遺跡の集落(国史跡)が営まれる。発掘調査では、堅穴住居で構成された居住域とともに、広大な水田跡が検出されている。

古墳時代になると、畿山に安土瓢箪山古墳が築造される。旧小中の湖の最奥部に突き出していた、尾根上に築造された、近江でも最古の部類(4 世紀中頃)に入る全長 134m の前方後円墳である。琵琶湖を望み、その権威を知らしめるような場所に古墳が築かれていることから、被葬者は最初に湖上へ力を及ぼした首長であると考えられている。また、この古墳が築かれた尾根の北麓の扇状地には、当時の船津があったことが推定されている(2)。

奈良～平安時代には、弥生時代の大中の湖南遺跡の集落が発見された場所で、再び人々の活動が見られるようになる。集落跡などの発見はなかったが、皇朝十二銭や緑釉陶

器・灰釉陶器・石帯などが数多く見つかっているため、この場所に官衙的な施設があったと想定される。

天正 4 年(1576)に織田信長が築城した安土城の城下町には、西の湖に面して位置する豊浦港と、西の湖からさらに内陸に入った地点に位置する常楽寺港の二つの港が存在していた。

常楽寺港は、江戸時代には、湖東平野の年貢米を積み出す港として利用されていた。そして、明治時代初期には蒸気船が発着する港としてにぎわった。

このように、安土山周辺に広がる内湖群の周辺は、弥生時代から現代に至るまで、生活・軍事・人や荷物の運搬などに欠かせない重要な場所であったといえる。

#### 3. 平成 12～13 年度の発掘調査について(図2、写真1・2)

2 基の石敷き遺構についての範囲確認調査を行った結果、遺構の規模や構造が明らかとなった。

また、その他に、調査後の立会調査や図面整理調査で時期の異なる石敷き遺構 2 基(第3・第4遺構)の存在も確認できた。これらの遺構は、それぞれ近接した場所から検出しており、何度も造り替えられ、補修されながら使用されていたことなどが窺われた。なお、石敷き遺構の構築に使用された石材は、30～50 cm 角程度の大きさの湖東流紋岩類であり、近隣の安土山山麓から運ばれたものと考えられる。なお、これらの遺構は埋め戻し、現地で保存されている。以下、各石敷き遺構についての概略を記述する。

第1遺構は、検出長 27.0m・幅 2.2～3.0m の規模であった。北側先端部は、第4遺構の石敷きによって壊されていた。中央部の構造は、両側に側板を横長に配置し、横板・杭などで固定した枠組みの内部に石材を充填したものとなっていた。主軸方位は、石敷きの中心部で計測すると、N 2° E である。時期は、側板に近接した地点から出土した土器などから、7 世紀後半頃と考えられる。

第2遺構は、全長 42.0m・中心部の幅 1.8～2.0m であった。中央部の構造は、矢板杭を打ち込んで側板とし、内部に石材を充填したものとなっていた。主軸方位は、石敷きの中心部で計測すると、N22° E である。時期は、矢板列に近接した基底面から出土した土器などから、8 世紀頃と考えられる。

第3遺構は、発掘調査終了後に、第1遺構の北東側に当たる部分で、U 字溝埋設工事に伴う立会調査で検出した。まばらに並んだ杭列を検出したが、その構造等は明らかではない。杭列を構築する材としては、矢板杭や杭として転用された建物の土台がある。遺構基底面から土器の出土が



1. 大中の湖南遺跡(石敷き遺構検出地点)    2. 国史跡大中の湖南遺跡    3. 国史跡瓢箪山古墳    4. 特別国史跡安土城跡  
5. 船津想定地    6. 豊浦港    7. 常楽寺港

※ベースマップは国土地理院 1:25,000地形図「近江八幡」・「八日市」・「沖島」・「能登川」に拠り作成。

図1 調査地位置図



写真1 第1遺構(南より)



写真2 第1遺構・第2遺構(西より)

※第1遺構：奥側、第2遺構：左下

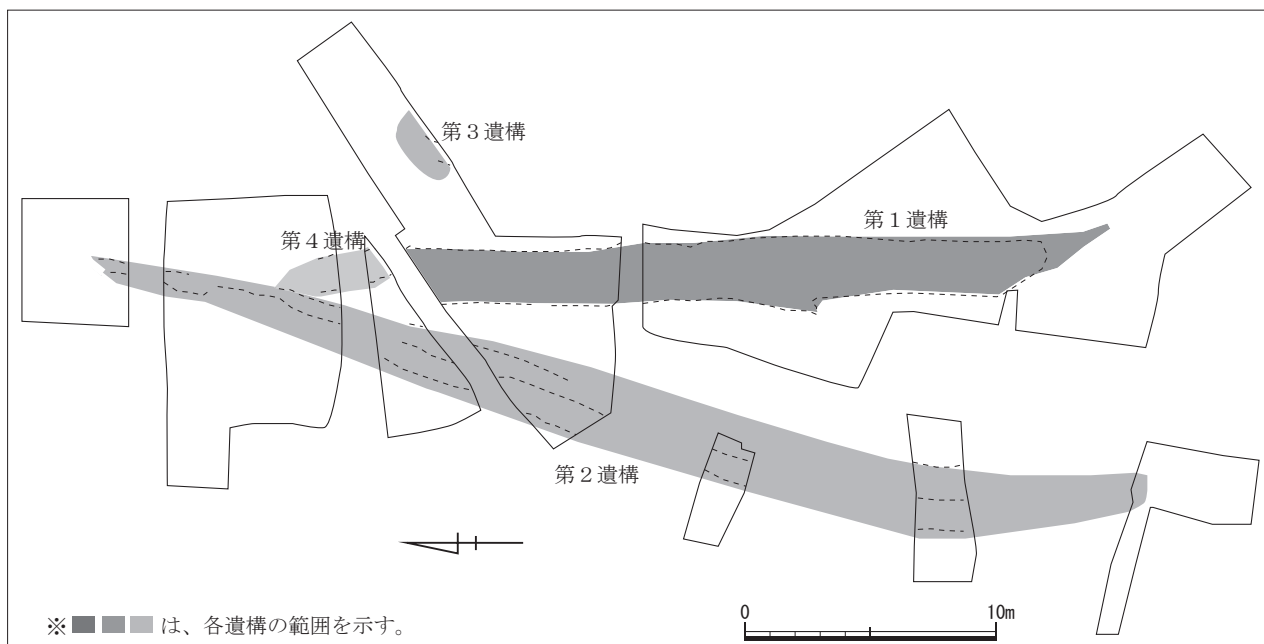


図2 主要遺構位置図

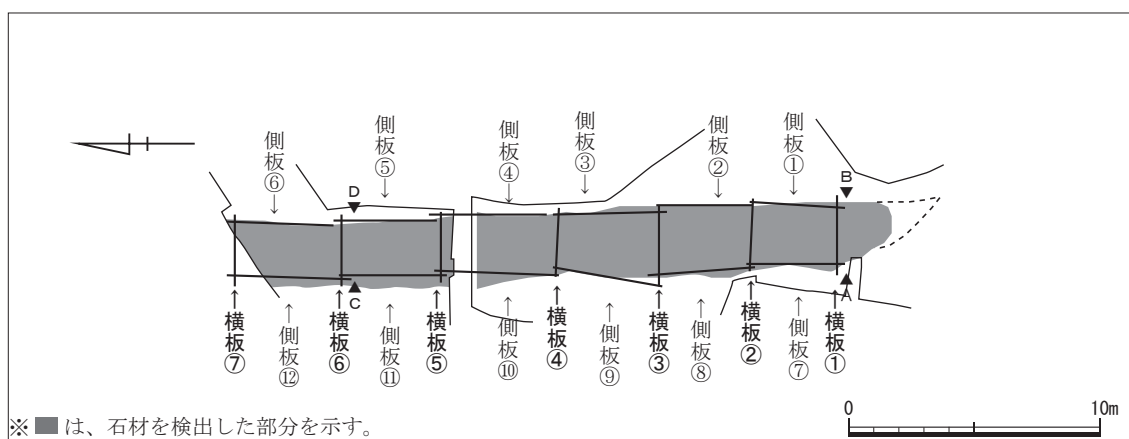


図3 第1遺構側板・横板位置図



写真3 第1遺構  
断ち割り状況(C-D地点)(南より)

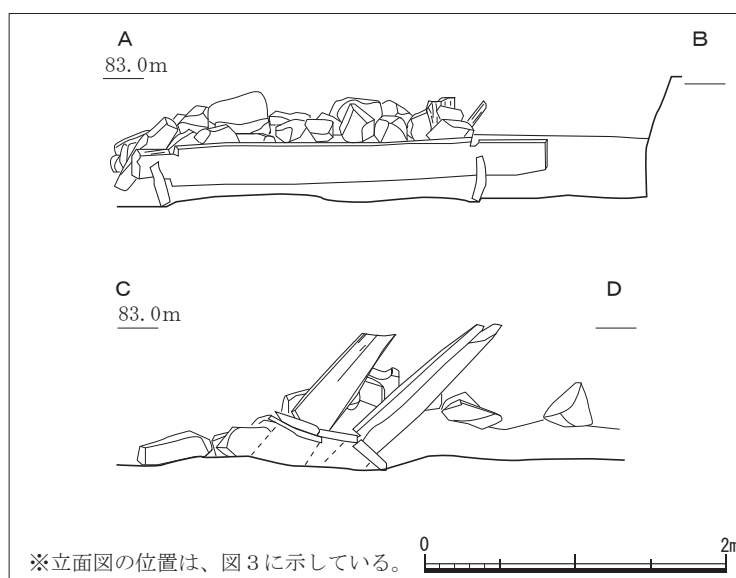


図4 第1遺構立面図

見られなかったため、時期は不明である。

第4遺構は、発掘調査終了後の整理調査の段階で確認したものである。第1遺構の北側延長部と考えられていた部分で、その上面に第1遺構と方向の異なる矢板杭列を2列確認した。このため、別遺構の可能性があると考えた。この2列の杭列は、平行して打ち込まれ、主軸方位はN11°Wである。時期は、不明である。

#### 4. 第1遺構の構造について(図3)

中央部の構造は、両側に側板を横長に配置し、横板で固定した枠組み内部に石材を充填したものであった。側板・横板にはヒノキの厚板材が使用され、表面には加工時の手斧によるハツリ痕が明瞭に残っていた。

側板と横板の上下の両端には、切り欠きがみられ、その形状は、四隅を相欠き組にして積み上げる、積み上げ式横板組相欠き仕口型の井戸枠に使用された板材に類似していた。このことから、切り欠きどうしを組み合わせ、石敷き遺構の枠組みを保持していると考えた。

側板・横板が積み上げられた状態をそれぞれの地点で確認したところ、側板①・側板⑦で区画された部分は、側板が2段で組まれ、側板②～⑥・側板⑧～⑫で区画された部分は、側板が3段で組まれていたことが解った。

陸地に近い側板①・側板⑦で区画された地点では、遺構基底面が南側に向かってなだらかに高くなることから、段数を一段省くことにより、側板の上面の高さを水平に保つ工夫をしたと推定できる。

さらに、側板と横板が組み合った状態を確認するために、2個所で石敷き遺構の断ち割り調査を行った。南端の横板①付近の断ち割り調査(図4：A-B)では、遺構基底面上に配置された側板⑦の最下段とそれに組み合った横板①の最下段の板材が確認できた。

また、第1遺構は、中央部の側板⑨～⑫にかけて、西側に倒れた状態で検出したが、この部分の横板⑥付近の断ち割り調査(図4：C-D、写真3)では、3段分の側板⑫が、2段の横板と組み合った状態で確認できた。

遺構を構築していた板材は持ち帰ることができなかったため、現地ですべて計測を行った。側板は、部分的に計測したものを含めると17枚分計測できた。長さ3.34～5.2m・幅20.0～25.0cm・厚さ2.0～4.5cmを測る。横板は、部分的に計測したものも含めると9枚分計測できた。長さ2.54m～2.7m・幅20.0cm～28.0cm・厚さ4.0cm～5.5cmを測る。側板・横板とも、長さ・幅・厚さにややばらつきがみられた。

#### 5. おわりに

大中の湖南遺跡で検出した第1遺構の枠組みは、その構造から、日本において7世紀後半頃から造り始められる、積み上げ式横板組型の井戸の構築技術を応用したものであ

ると考えられる。

積み上げ式横板組型井戸の井戸枠には、四隅を相欠き組にして積み上げる横板組相欠き仕口型と、各段の高さを揃えながら積み上げる横板組井籠型の2種類がある(3)。

第1遺構で使用された側板・横板などの板材には、長さ・幅・厚みに多少のばらつきがみられたが、相欠き仕口型の技術では、高さの異なる板材を相欠きの幅や深さを調節することによって利用できるため、板材の厚さや幅が多少違っていても、組み合わせることが可能であったといえる。

板材を得るためにヒノキの大木を切り出し、長さ・幅・厚みをそろえた板材を必要な枚数用意し、それを組み立てる高度な技術をもつ人材を確保するためには、経済力と権力が必要であったことが考えられる。第1遺構が構築された7世紀後半頃は、律令国家による港などの整備が進められた時期でもあり、そういった政治的背景の中でこの遺構が造られたことが推定される。

#### 註

- (1) 横田洋三(2005)「第8章まとめ 第1節-4. 港湾施設としての評価」『ほ場整備関係(経営体育成基盤整備)遺跡発掘調査報告書 32-2 芦刈遺跡・大中の湖南遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会に拠る。
- (2) 用田政晴(2007)「第4章 琵琶湖水系における古代首長の役割 図4-3」『琵琶湖をめぐる古墳と古墳群』サンライズ出版株式会社に拠る。
- (3) 鐘方正樹(2003)「井戸の構造と分類」『ものが語る歴史シリーズ8 井戸の考古学』(株)同成社に拠る。

#### 写真典拠

写真1～3 『芦刈遺跡・大中の湖南遺跡』(2005)に拠る

#### 文献(著者名・機関名 50音順、刊行年順)

- 秋田裕毅(大橋信弥編)(2010)『ものと人間の文化史 150 井戸』法政大学出版局
- 秋田裕毅(1997)『びわ湖湖底遺跡の謎』創元社
- 近江俊秀(2020)『海から読み解く日本古代史』朝日新聞出版
- 黒崎直(1995)「藤原宮の井戸」『奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集刊行会編 文化財論集Ⅱ』同朋舎出版
- 黒崎直(2004)「琵琶湖と弥生文化」『展望日本歴史』東京堂出版
- 千田稔(2001)『埋もれた港』小学館
- 樋上昇(2016)『歴史文化ライブラリー434 樹木と暮らす古代人』吉川弘文館
- 用田政晴(2009)『海と山をめぐる考古学』サンライズ出版
- 渡邊晶(2004)『歴史文化ライブラリー182 大工道具の日本史』吉川弘文館

(たなか さきこ：調査課 副主幹)

**ANNUAL BULLETIN**  
**of**  
**Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage**  
**Vol.34 2021.3**

私たちは文化財をとおして  
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会  
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages